

(様式2) 平成30年度 [自己評価報告書]

学校番号	学校名
4	川崎市立橋高等学校 全日制
校長名	吉田 宏

学校教育目標	学校経営の目標	今年度の重点目標
真理と正義とを愛し互いに敬愛の誠を尽くし、勤労と責任を重んじ、自主的精神に満ちた心身共に健康な平和国家社会の形成者の育成 1知性と品性を高め豊かな情操の育成に努める 2協同友愛 3自治の精神の確立 4勤労愛好の習慣の体得	1 課題解決力を育てる教科指導 2 進路を見すえた特別活動等の指導 3 豊かな心で社会貢献できる人材の育成 4 魅力ある学校づくり	・基礎基本の定着に基づく応用力、課題解決力及び自己学習力の育成 ・個々の進路を考えた進路指導、生徒指導、特別活動指導の充実及び生徒の自主性の育成 ・人権尊重教育、道徳教育、共生教育、健康・安全教育による豊かな心とコミュニケーション能力の育成 ・開かれた信頼される学校づくりと活力あふれる教職員組織の構築

評価項目	具体的な取組	実現状況及び課題	具体的な改善策
1 教育課程学習指導	自己学習力を強化し、日常生活の中で家庭学習を身につけさせるために課題を出したり、学習環境を整えたりして、自学自習の習慣を身につけさせるように努力する。そして、さらに、自ら問題解決力を身に付けられるよう、また、個々の思考を表現できるように授業に工夫を凝らす。そのため、言語活動やアクティブラーニング等を積極的に授業に取り入れる。	学校評価アンケートをみると、個々の生徒に対する理解力に応じた教科指導について、教師側の考えと、生徒側の考えとに大きな差が見られる。また、家庭学習が不十分であると考えられる生徒が多い。早朝や昼休み・放課後などの補習や定期考査前に自習を進められる環境を整えることが急務であると思われる。また、新しい学習指導要領や大学学力共通テストへ準備の研鑽をさらに深めることと同時に、基礎・基本の定着に基づく応用力や自己学習力の育成に努めていく必要があると思われる。	新学習指導要領が示され、高大接続計画に向けた新しいカリキュラム編成の検討が必要になっており、カリキュラム検討委員会を立ち上げ、新しいカリキュラム、また、それに伴う、時間割の編成、時訂の変更について話し合っている。家庭学習の不足を補うため、宿題や補修課題を出し、自己学習の習慣化をサポートしていく必要がある。また、各学年とも、朝学習(自習)に力を入れ、それぞれに工夫を凝らしている。これからは、学習委員会などを有効に使い、全校で共通して取り組む体制を整えたい。
2 進路指導	各学年に応じた段階的な進路指導を実践している。3年間を見通した進路計画に立脚し、生徒の進路希望実現のサポートを行っている。また、選択制カリキュラムに対応したキャリア教育や、外部講師による講演、大学見学などを実施するとともに、保護者へ最新の情報提供にも努めている。	学年や普通科、国際科、スポーツ科といった生徒の状況に合わせた進路指導や情報提供を行うことで、生徒一人ひとりの進路意識を高めることができた。また、大学見学・大学模擬授業なども実施し進路実現に向けて多方面から支援できた。JAPAN-eポートフォリオが導入され、生徒が不利な状況にならないよう対策が急がれる。生徒の進路実現のために、最新の情報を集め対策を立てることが今後の課題である。	思考力、キャリア・プランニング能力の向上に向けて、より多くの体験的な学習や外部講師の活用を工夫していく。生徒に職業意識や人生観を涵養するために一層学級担任と家庭との連携協力を目指す。進路指導部は進路指導の充実を図り、各学年・各部署に最新の情報を提供し共有することを今後も継続していきたい。
3 生徒指導	「安全で安心して学べる環境づくり」を最優先に規則の遵守と主体的な活動を図る取り組みで、生活面や身だしなみなどの指導を行う。また、互いを認め合い、尊重しあいながら学校生活を送れよう、指導していく。教育相談面での取り組みをカウンセラーとの連携を充実させ、一人ひとりに対してきめ細やかな対応ができるようにする。	学校生活を通して主体的に行動できる生徒はまだ多くないと感じる。今後も様々な投げかけを生徒にしていき自ら考え、行動できるように促していきたい。また、いじめの問題やトラブルな多適宜アンケート調査を行い、生徒の行動を常に注視していくとともに、担任の先生と連携を取り、生徒たちの様子や声をいち早く察知できる体制をとってきたい。	教員間の連携を深め共通理解を図ることが重要である。教育相談やアンケート調査など日常生活の中で様々な教員が関わりながら解決できるよう、よりきめ細かい環境づくりが大切であると考えられる。また、生徒の主体性という意味で、部活動や学校行事など自ら積極的に参加できるような指導を継続していくことが、重要であるとえられる。
4 生徒会指導	橋花祭(歌合戦・体育祭・文化祭)を中心とする各生徒会行事(対面式・部活動紹介・生徒総会・三送会)の企画・運営及び、日常的な組織運営(代議員会・各種委員会・部活動・壮行会・全国高等学校野球選手権や春の高校バレーの応援 等)を、分掌・学年と連携し、生徒が主体的に取り組めるよう支援していく。また、保護者や地域等とも連携し、環境整備と指導を行う。	橋花祭等の生徒会行事は、昨年度以上の内容となるよう工夫された内容であった。どの実行委員会にも、委員会の中心となる企画部を設置し、昨年度の課題を解決するための改善策を打ち出すとともに、今年ならではの新しい企画を立てていた。各行事には、実行委員だけでなく、多くの生徒が主体的に取り組み、高い満足度を得ている。課題としては、初めてその実行委員になる生徒が多い委員会では、活動内容の把握に時間がかかるため、より計画的に準備が進められるように助言していく必要がある。	生徒が所属する委員会は毎年変わるため、経験者が少ない委員会もできる。その経験を補うためにも、指導記録の引継ぎを綿密に行い、生徒への情報提供の内容をより濃くする必要があり、これにより課題が明らかになり、限られた時間を有効に使い、充実した活動ができると考えられる。また、複数の教員で指導を分担する場合、共通理解を深めることが大切であるので、連絡をさらに密にしていく。
5 部活動指導	各部ともに、基本的な技術の定着を図ることはもちろん、肉体的にも精神的にも健康や安全に配慮する。そして、それぞれの目標に合わせた活動ができるように練習計画を立てて行う。指導方針において、助言を丁寧におこない生徒に寄り添う指導を目指す。また、基本的な生活習慣を定着させ、さらに挨拶や礼儀、活動場所の清掃などの指導を丁寧に行い、部活動の成果が日常生活においてもその行動や言動に反映されるような指導をする。	今年度の部活動指導方針として「助言を丁寧におこない生徒に寄り添う指導」を実践し、運動部、文化部ともに部活動が活発に行われ、全国大会等で多くの結果を残している。技術的に向上し、日々の努力が実績となって表れる部が多い。また、基本的な生活習慣や挨拶、礼儀、活動場所の清掃などが、学校生活に留まらず、毎日の生活の中でも発揮できている。また、学習面では、部活動とのバランスがうまく取れず、ストレスとなる生徒も存在するため、時間の使い方の工夫など継続して支援していくことが大切である。	指導において助言を丁寧におこない寄り添う指導によって充実して部活動での活動となった。学校生活における学習・部活動・行事のバランスを上手に取り、前向きで充実した毎日過ごすよう、指導・支援を丁寧に行っていく。また、部活動の時間が有意義で成長につながるようするため、地域や保護者との連携を密にし、協力していくことも今まで以上に必要と考える。毎日の活動の中で指導・支援の仕方を考え、練習計画や練習内容を工夫することがさらに必要であるとする。
6 健康安全指導	本校の健康安全面の課題を踏まえ、学校保健安全計画を立案し現状の改善、向上を図る。全体に「薬物乱用防止教育」を実施、またスポーツ科と運動部を対象に「食育講演会」を実施し正しい知識の習得と実践に繋げる。1学年を対象に「交通安全講習会」「性教育講演会」を実施し、高校生として自らが考え健康で安全な生活を送れる力を体得できるよう努める。また教職員を対象に医師、看護師を講師に迎え、「心肺蘇生法」「食物アレルギー対応研修」を実施し、職員の共通理解を図るとともに緊急時の校内体制を整えることで生徒が安心して学校生活を送ることができるようになる。	年度当初に交通安全講演会を取り入れ、次に食育講演会、性教育講演会を実施することで系統的に生徒の健康安全に対する意識を高めることが出来た。職員間では生徒の個々の健康課題の周知と対策について共通理解を図り、充実した連携が出来るような研修を実施できた。一方、けが、疾病への対策への取り組みはしてきたものの生徒のメンタルヘルスに関しては不十分である。今後も多様化・複雑化する健康課題を抱える生徒が増えつつあるので、より充実した支援のできる校内体制が必要である。	生徒の精神面、健康面での支援が養護教諭、スクールカウンセラー、担任に留まっていることも否めないため、分掌、学校全体の組織として対応していく体制を充実させることが必要である。また専門的な指導が必要であれば外部機関と連携し、生徒へよりよい支援ができるようにしていきたい。今後職員研修の充実、生徒のニーズに合わせた講演会などの企画実施をし、生徒が安全に学校生活が送れるよう取り組んでいきたい。
7 国際理解教育	高校生活3年間を通して生徒たちに系統的な指導が出来るように、効果的な年間指導計画を立案する。立案された計画に基づき、国際理解教育を推進し、生徒達が世界に目を向け、やがては世界に貢献できる人材となれるように様々な機会を提供する。国際協力機関(JICA・WFP・UNICEFなど)や大学などから講師を招聘し、時勢に即した指導ができるように心がける。6月と11月に開発途上国理解講演会を実施し、幅広い分野に視野を広げる機会としている。韓国・中国文化理解講座、ミャンマーベンパル事業、多文化共生を理解するワークショップ、貿易ゲーム等を実施し体験型の国際理解教育を実施する。	開発途上国理解講演会を聴いたり体験型のワークショップに参加したりすることで、生徒たちは途上国の抱える諸問題に目を向けるようになっていく。それぞれの学習の振り返りを行うことで次の課題を見つけ、その課題を解決するために自分たちはどのような考えを持ち、どのように行動していくべきなのかを考えられるようになっていく。学習したものを自分たちで発表して、情報や考えを共有できる次元まで高めあうことができていく。今後も、日本を取りまく国際状況の変化に関する理解については、生徒たちが更に学んでもらう必要があるだろう。また、現在実施しているプログラムの内容と実施時期についても引き続き精査する必要がある。	開発途上国のみならず世界が抱える諸問題については、指導者側が更に問題意識を持って生徒たちにアプローチしていく必要があるだろう。また、文化の多様性の現状認識で終わってしまうことなく、その事象の背景にあるものについて深く調べ学んでいこうとする姿勢を生徒たちに身につけさせる必要があるだろう。今後は、生徒達が学んだものをお互い共有できる時間帯の設定をしていきたい。また、国際理解教育の推進のためには、専門的な知識を持つ講師を積極的に招聘し、生徒にアプローチをしてもらうことが不可欠であるとする。
8 スポーツ交流	高大連携事業の一環として、メディカルチェックを国際武道大学の協力の下、1年生・2年生で実施する。また、スポーツ総合演習のスポーツ行事の企画運営の一環として、小学校3校と「新体力テストテスター」を企画・運営・サポートの形で参加する。体育祭においては、実技発表を玉川中学校2年生を招き参観をする機会を設ける。さらに等々力アリーナで行なわれる「手をつなぐフェスティバル」に2年生スポーツ科が参加し、障害者、ボランティア、地域の方々とのスポーツ交流を行う。	様々な交流の機会が多く設定されており、どの交流に対しても生徒たちは積極的に取り組んでいる。その中で、スポーツリーダーを目指した中で、企画力の向上・運営方法の学習、精神面での成長など多くのことを身につけることができたと思われる。課題としては、多くの時間を要するこれらの企画・実施の中で、「自分の時間の使い方」「実践力」「進化・発展させる応用力」をさらに身につけ、発展させることが課題となる。	現在の状況では、交流の場を増やしていくことは、難しいと思われる。これらの活動の目的と専門学科の科目との位置付けを明確にし、実施内容の検討や、体系化をしっかりと組み立て、さらなる充実を図ってきたい。また、指導者側の授業の内容の精選、生徒自らの時間の確保、企画段階での工夫などに積極的に取り組んでいきたい。
9 組織運営	各校務分掌や委員会、教科からの要望や問題提起に対して、運営委員会内で検討を進めたり、当該部署に解決策を諮問したり、また新委員会を設立して個々の事業への対応を行っている。定期的に開催される職員会議において、全職員で情報を共有し、協調して諸問題の解決を図っている。生徒指導等に関わる内容については、臨機応変にスピード感を持って臨時職員会議を招集し、生徒の学校生活をサポートできる体制を整えている。	次期学習指導要領に基づく新カリキュラムに関しては、教育課程検討委員会からの要望を受け、運営委員会主導で臨時の新委員会(教育課程編成方針策定委員会)を設立し、学校としての方針(カリキュラムの枠組)を取りまとめることができた。今後はカリキュラムの中身や実質的な運用を関係部署に促していかなければならないと考える。担任・分掌調整については、昨年度からの試行的な調整方法で、一定の改善の手応えを感じている。しかし、うまく機能していない制度も見受けられるので、さらに議論を深めていく必要がある。	昨今、個々の分掌や委員会では対応できない懸案が増えてきている。現在は分掌横断的な新委員会を設立して対応を行っているが、将来的には分掌の再編、人数調整等も必要となってくるであろう。また、学校の将来像を見据えた上で、学校全体を把握し調整できるような、統合的な組織も必要ではないか。
10 開かれた学校づくり	学校行事・生徒会行事・PTA活動への参加者が高止まりしている状況を受けて、校内担当者間での連携を密にし、学校教育活動を円滑に執り行っていく。地域・保護者・学校の3者が一体となり、充実した学校生活の構築に努める。地域からの意見や要望を集約し、PTA活動もより効率化していく。授業や学校行事等を常時公開し、地域や保護者との情報交換の場を多く設定し、学校教育活動への理解を深めていく。	大きな問題もなく、地域・保護者の理解と協力のお陰で、今年度も学校教育活動を円滑に行うことができた。PTA活動の一環である懇談会については、保護者と各学年との直接連絡を基本として設定したが、学年やクラスの間で若干意思疎通がうまくいかないことも見受けられた。また、地域や保護者からの様々な意見や要望は教員間で共有し、学校内での議論を促進した。	相変わらず学校からの情報が家庭に届かないというケースを数多く耳にする。生徒への指導を徹底し、家庭への啓発活動も引き続き実施していく必要がある。情報発信の手段も今後検討していく必要があるかもしれない。学級懇談会については、これからも保護者と学年・担任との直接情報交換を基本としていきたい。

学校関係者の評価	今年度のまとめ・次年度へ向けての取組
<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか家庭での学習ができないので、平日や休日など学校内のどこかで学習する環境をつくってほしい。 ・今後、18歳で成人としてあつかわれるので、社会人の一員として地域のことを考える人間に成長してほしい。また、地域と協力して、防災訓練などができないか。 ・中学では教えられない競技(陸上など)を、橋高校を使って、中学生を呼んで教えてもらっているのが非常に助かる。また、NECや富士通との交流も深めてほしい。これからは、スポーツ関係だけでなく、文化部の活躍も期待している。 ・新学習指導要領や大学入学共通テストへの対策をこれからも進めてほしい。また、2年生の理解力、表現力を深める努力を進めてほしい。 ・下校の仕方や自転車に乗るときのマナーなどを地域の一員として考えてほしい。行事等の騒音やグラウンドの砂ほりなどで困るときもあるが、これからも地域として協力していきたい。 ・学校で配布されている文書等がなかなか家庭に届かない時もあり、橋高校の情報が伝わってこない事もあるが、ホームページなどを活用している。また、進んで公開授業や面談等で学校に関わってきた。 ・自分の子どものことを考えると、入学したときとは想像もつかないほど有意義な高校生活を送ることができた。これからも地域やPTAで協力していきたい。 	<p>今年度の自己評価の方法は昨年度と同様にした。ここ数年間の変容を見るためにも、まず生徒・保護者の評価を先に行い、その結果を全教員で確認した上で教員の自己評価を行うことが必要と判断した。自己評価のやり方も昨年と同様に行った。教員の自己評価においては、学習面と進路(選択科目)の項目では大きな変化はなかったが、現状での問題点を認識し、今後検討し、新学習指導要領編成に向けて、新たに取り組んでいく必要があるだろう。学習面では、アクティブラーニングの授業を導入することによって、授業の有り様も大きく変化した。その定着度を確実にすることも必要である。また、今後、理解度に対する生徒側の原因がどこにあるのかを明らかにする取り組みが必要であるとされる。家庭学習に関しては、引き続きできていないという回答が多いが、各教科からの課題は数多く出されており、その提出状況から判断すると家庭学習は行われているはずである。それにも関わらずできていないという回答が多い点についても、細かい分析が必要であろう。さらに、生徒本人が自主的に家庭学習へ取り組むためのアプローチも必要であるとする。1年生からおそらく大学入試に取り入れられる民間等であろう「eポートフォリオ」でも、生徒各自が取り組んだ内容について振り返る必要性が出てきており、日頃の家庭学習の重要性について、今後も根気よく指導していく必要がある。その点、2年生の大学入試における民間等が実施する資格・検定試験の活用を見据え、資格取得を奨励した結果、3年生だけで2年生においても英語の資格取得者が大幅に増加した。キャリア教育についても、昨年度から新たな取り組みを始めた。平日に学校として1・2年生全体で大学訪問を今年も実施した。生徒や保護者からは、卒業後の進路を考えていく上で良い契機となったという意見が多かった。また、今年度からは、新しい学習指導要領の編成に向けた取り組みが為されており、今後、各分掌や教科、学科からの代表で組織される委員会、カリキュラム委員会と協力し、時程の編成を踏まえた新しい体制作りによりよく取り組んでいくことになる。そのためにも、多方面からの情報収集と的確な情報分析を行い、その対応を強化していく必要がある。学校評価アンケートを総合的に判断すると、学校生活は落ち着き、生徒は自主的にそして意欲的に様々な活動に取り組んでいることがうかがえる。そのために、次の段階を目指していくことが肝要と思われる。</p>